

慈照寺方丈・玄関廊修理工事

主席研究員 藤本春樹／研究員 井上年和

1. はじめに

東山慈照寺、通称銀閣寺は足利8代将軍義政が造営した山荘東山殿を、延徳二年（1490）義政の菩提を弔うため寺に改めたことに始まる。

その後一時荒廃したようであるが、近世初頭に再興され、諸堂の修理・再建がなされた。

今日でも東求堂（文明十七年 1485 国宝）、観音殿（通称銀閣 長享三年 1489 国宝）、周辺の庭園などは東山殿の名残を今に伝える貴重な遺構として知られており、境内も特別名勝・特別史跡に指定されている。

2. 方丈・玄関廊について

方丈は元和・寛永年間の復興に際して再建されたと伝えられ、玄関の細部様式などに当時の特色がみられる。梁間五間、桁行七間半の六間取型方丈形式で、南面に広縁、西面に入側縁を付ける。仏間は前面を畳敷きの真前とし、後一間に仏壇を構えている。仏間の東脇室は、床・付書院がつけられ、南・西面の側廻りは外面舞良戸・内明障子とし、室内緒室は襖で仕切られ、池大雅や与謝蕪村筆の襖絵が描かれている。室中は中央を折上小組とする格天井を張る以外、いずれも猿頬天井としている。屋根は入母屋造り、柿葺で、棟を銅板箱棟とし、獅子口をのせている。

玄関廊は、西面を正面とし、折矩で方丈の南西隅に取り付く。屋根は方丈同様柿葺で棟は銅板箱棟、正面を唐破風とする。

方丈、玄関廊とも数度にわたる形式の変更が行われているようであるが、良質の木材が使用され、当初材も良く残されている。



図1 修理前方丈全景（南東より）



図2 修理前玄関廊正面（西より）

3. 工事の経緯

方丈の修理にあたっては学識者や関係機関により構成される整備委員会を開催し、各委員の指導・助言のもとで修理方針の策定を行った。

整備委員会出席者

慈照寺 有馬頼底住職 坂根孝慈執事長 平塚景堂執事 小出量堂執事
和泉徹統括課長 高山富雄庶務課長 北川紀昭会計課長

整備委員 川上貢委員 中村昌生委員 永井規男委員 中村一委員

京都府 小宮陸文化財保護課建造物第一係主任（オブザーバー）

京都市 石崎了文化財保護課課長 河原伸治同課技師

北村誠工務店 清水年男

建築研究協会 藤本春樹主席研究員 井上年和研究員

工事期間 平成 17 年 6 月 1 日～ 10 月 20 日

工事関係者

総合請負・木工事	北村誠工務店	左官工事	土橋左官店
石工事	芳村石材店	金具工事	モリモト社寺工芸社
柿葺工事	宮川屋根工業	仮設工事	淵上組
瓦屋根工事	寺本甚兵衛製瓦	電気工事	波多野電機
板金工事	田中板金	給排水工事	丸水設備工業
建具工事	大谷建具工房	庭園工事	樋口造園

4. 修理方針

方丈は屋根柿が耐用年数を超え、軒廻りの木部にも腐食がみられたので屋根替え及び部分補修とした。目地切りのモルタル塗となっている軒内を四半瓦敷とし、軒廻りや妻飾り、床下、天井の腐朽・破損箇所の取り替えを行うこととなった。また、屋根は柿の全面葺替えを行い、軒樋の取り替えやドレンチャー設備などの改修も併せて行うこととなった。

玄関廊は軸部の不陸・傾斜が著しく、木部の破損も大きかったので解体修理とした。土間は不陸修正の上四半瓦敷とし、木部の破損箇所は補修、取替を行い、正面板戸は戸板を取替え、屋根は方丈同様柿を全面葺替え、獅子口を新規作成することとなった。また、東側の花頭窓廻りは、後世に改修を受けていることがわかったので、復元することとなった。

棟は方丈・玄関廊とも銅板箱棟となっていたが、都林泉名所図絵に倣い、瓦積みに変更することとなった（後述）。

5. 調査事項

5-1. 破損調査

方丈は屋根の柿が耐用年数を超えている他、獅子口の凍害、軒廻や妻飾、床下の腐朽、外周土間のモルタルの摩耗など部分的な破損がみられた。軸部には大きな不陸や傾斜が目立ってくるいは生じていなかった。

一方、玄関廊は屋根柿の破損の他、軸部の不陸・傾斜も大きく、柱や桁、地覆の腐朽や折損、礎盤のめりこみなどが顕著で、斗の割れなどが見受けられた。地盤も西側が下がり雨水を呼び込んでいた。また、壁は数度にわたり塗り重ねられており、肘木の厚みよりも厚くなっていた。建具も正面開き戸の風食が著しく、戸板の板傍では合い釘が浮き出していた。

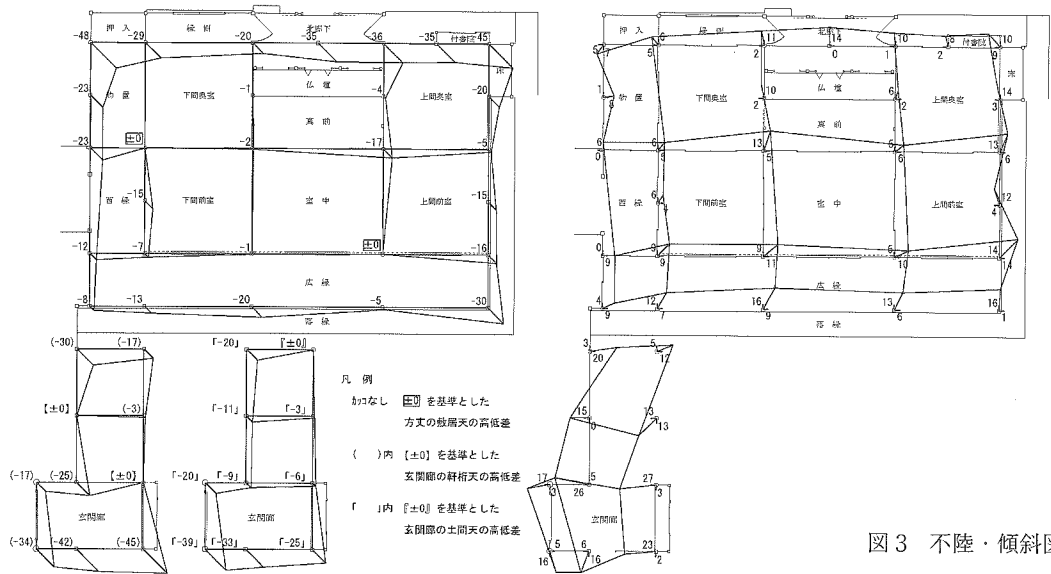


図3 不陸・傾斜図

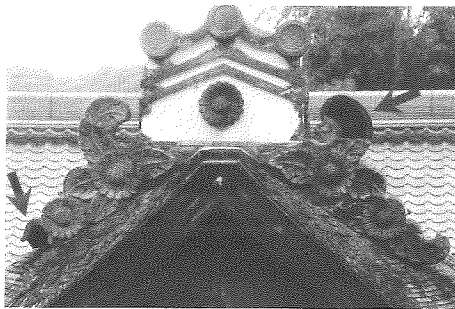


図4 方丈東側獅子口 凍害による欠損



図5 玄関廊正面建具の戸板 風食により相釘が浮き出していた。

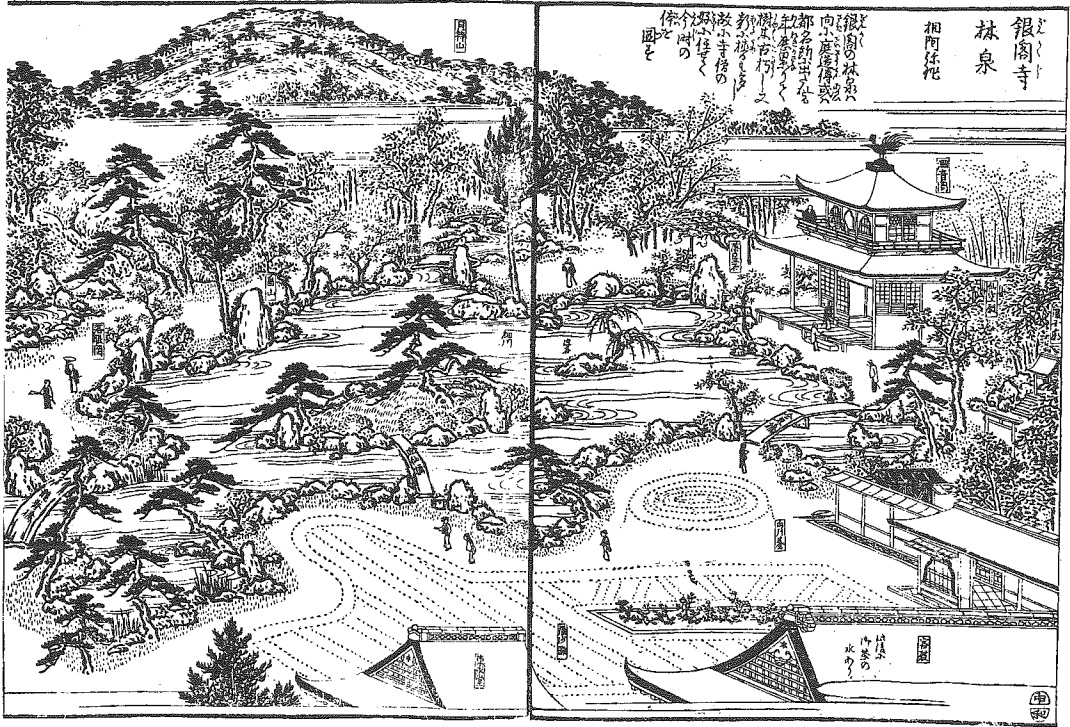


図10 「都林泉名所図絵」寛政十一年(1799)

また、「都林泉名所図絵」の銀閣寺林泉では、北東から鳥瞰図が描かれ、当時の方丈及び玄関廊の様子がわかる。これを見ると、方丈・玄関廊とも棟が瓦積みで、獅子口の形状も現在とよく似ているように見える。また、玄関廊東面の花頭窓の上には庇が描かれ（現在は庇は取り付いていない）、土間も四半瓦敷となっている。

5-3. 痕跡調査

修理工事中には方丈、玄関廊とも改造を示す様々な痕跡が見受けられた。

方丈では北縁入側柱筋の北面に風食がみられ、以前は外部であったと考えられ、図7の古図に示すように外縁であったことがわかる。また、中央二間半には長押の襟輪欠きが残り、長押が取り付いていたことがわかる。

真前では東西面の中央柱下部に矧木がみられ、仏壇框が取り付いていたと考えられ、現仏壇框筋に壁痕がみられること、南半間は敷居に床板用の小穴が突かれていることから、図8、9に描かれているように、南半間が板敷で、その後方に仏壇が付けられていたと考えられる。

上間奥室では東面の南一間は貼壁であるが、外部に舞良戸が嵌められており、西面の貼壁も襖絵を取り外し用いていることから、これらの貼り壁は後世のものと考えられる。

また、西面外部には壁痕や胴縁痕が残り、図6～8の古図にみられる「上庫裡」や図9にみられる縁が取り付けいていたことを示すものと考えられる。

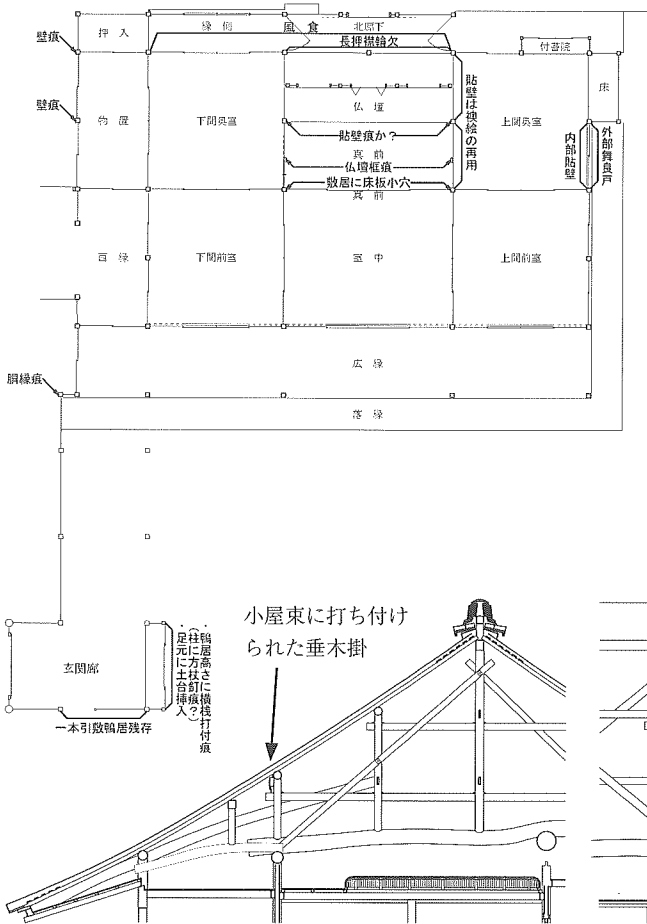


図11 方丈及び玄関廊痕跡図

北廊下の風食痕は図6、7に描かれているようにここが外縁であったことを示すものである。

また、仏壇前の痕跡も図7～9に描かれる変遷を示すものと考えられる。玄関廊は腰掛廻りに数度の改修を受けていた。

屋根が寄棟になる可能性を示す母屋

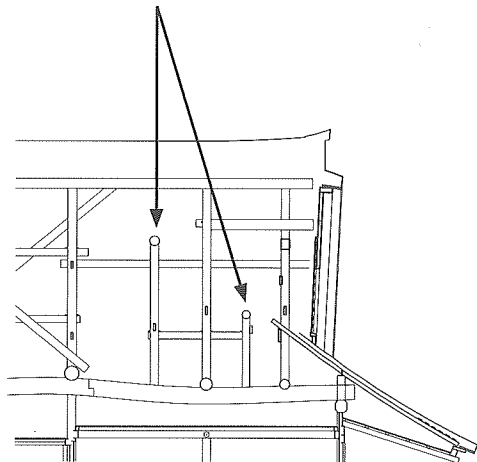


図12 方丈小屋断面図



図13 垂木掛上の銅木

垂木掛及びその上の銅木とも上部に釘痕が残る。

小屋裏には旧の垂木掛及び母屋が発見された。何れも垂木が打ち付けられた使用痕があり、交差部では相欠きに組まれ、野隅木が架かった痕も残ることから、屋根が寄棟であった可能性を示すものと思われる。また、垂木掛の上には銅木も取り付けられていたが、これらの使用状況は不明な点が多く、今後の調査に期待したい。

玄関廊は腰掛廻りに改修の痕が見られた。ひとつは明窓の変更で、旧の敷居の上に後補の敷居が載せられ、付鴨居が内側に打ち付けられ、吊束も付加されていた。その結果、明障子が内側に寄ることとなり、これは、明障子の雨がかりと敷居の破損を防ぐための措置と考えられる。ここは、後補の敷鴨居、吊束を撤去し、旧の姿に戻した。

柱の外部には鴨居高さに横棧が打ち付けられていた風食痕や釘痕もあり、その上部と約一尺ほど下にも数本の釘痕がみられた。これらを都名所図絵に描かれている庇の痕とすると、方杖に支持された出桁と横棧に板庇が掛けられた姿が想像できるが、今回は庇を取り付けなかった。

また、腰掛の柱足元には土台が挿入されていたが、当初の状況が不明であったため、今回は土台建のままとした。

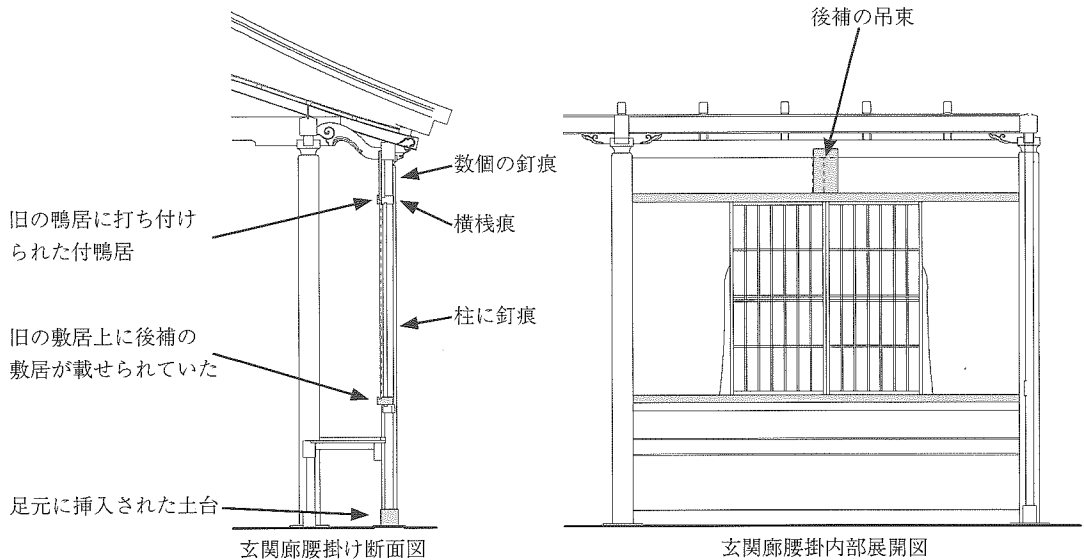


図 14 玄関廊腰掛詳細 (上)

敷鴨居は部材が付加され、足元にも土台が挿入されていた。外部には庇の痕と思われる釘穴が数カ所残っていた。

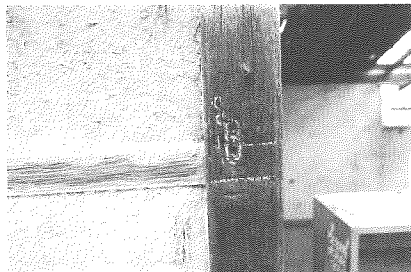


図 15 玄関廊腰掛柱外部 (東より) (左)

腰掛柱外部のあたりと釘穴。(都名所図絵に描かれている庇の痕か?)

5 - 4. 平面変遷

古図及び痕跡等から方丈は少なくとも3つの平面変遷をもつことが推測される。18世紀中頃では真前を半間の板敷、仏壇も半間とし、その後ろに五畳の部屋を配し、北縁を板敷の外縁としている。19世紀中頃には仏壇を一間に拡張し、北縁を室内に取り込んでいる。現況では真前を一間の五畳、仏壇も一間とし後方の部屋をなくしている。

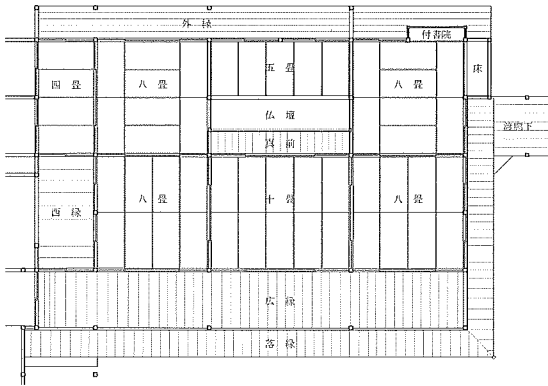


図16 18世紀中頃

真前を半間の板敷、仏壇も半間とし、その後ろに五畳の部屋を配する。
北縁は板敷の外縁とし、北西の部屋は四畳の畳敷きである。
また、西側に上庫裡が接続する。

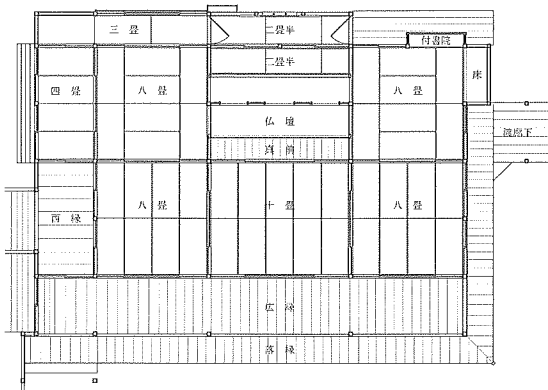


図17 19世紀中頃

仏壇を北に半間広げ、背面の部屋を二畳半とする。(古図では仏壇中央の仕切を花頭窓に描かれている)
北縁を室内に取り込み畳敷きとする。
上庫裡が撤去され、四畳西に縁を設ける。

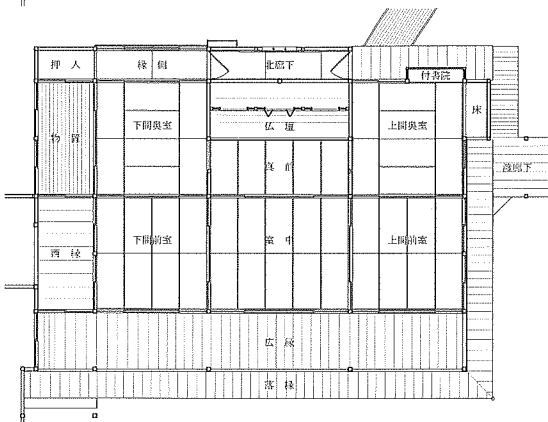


図18 現況

仏壇を北に半間移動し、真前を五畳の畳敷きとする。
北縁の西端を押入とし、四畳西の縁を撤去し、四畳を板敷の物置とする。
上間奥室の床の東に縁を廻す。

5-5. 墨書等

修理に際し、各所で墨書が発見され、方丈の小屋裏番付と玄関廊の当初番付が判明した。また、玄関廊小屋裏に昭和十二年の修理銘板が残っていたので、これらを紹介しておく。

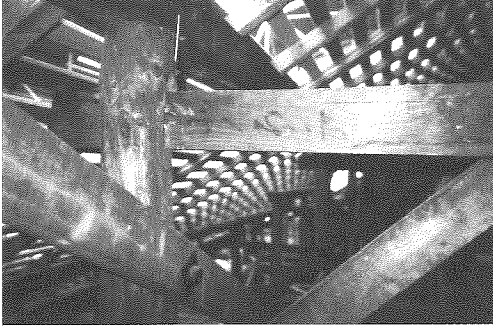


図19 方丈小屋裏墨書番付

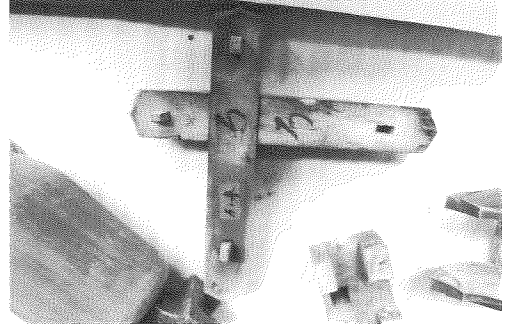


図20 玄関廊斗拱墨書番付

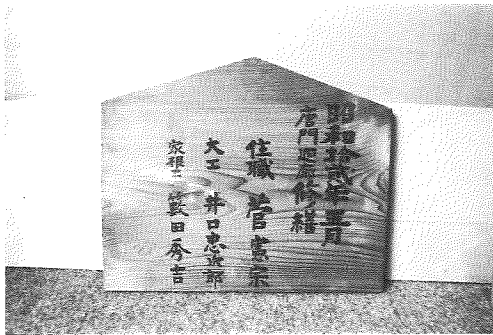


図21 玄関廊修理銘板

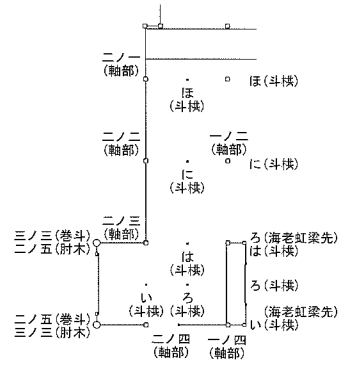


図22 玄関廊当初番付

6. その他

玄関廊には当初のものと思われる埋木や矧木が随所にみられた。これらの意図は不明であるが、その精緻さには驚かされた。

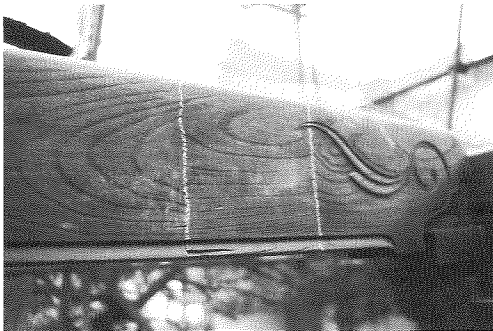


図23 玄関廊虹梁埋木

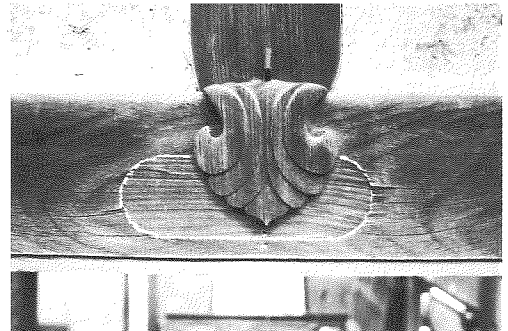


図24 同左

7. おわりに

方丈・玄関廊の修理にあたっては、整備委員の各先生方には終始ご指導、ご助言を頂き、施工を担当した北村誠工務店を始めとする各関係業者には多大なご協力を頂いた。また、本稿の掲載に関しては慈照寺様の許可を頂いた。ここに改めて深く謝意を表します。

尚、本工事に関しては修理工事報告書を作成する予定である。

(参考文献) 京都府教育委員会「京都府の近世社寺建築」1983

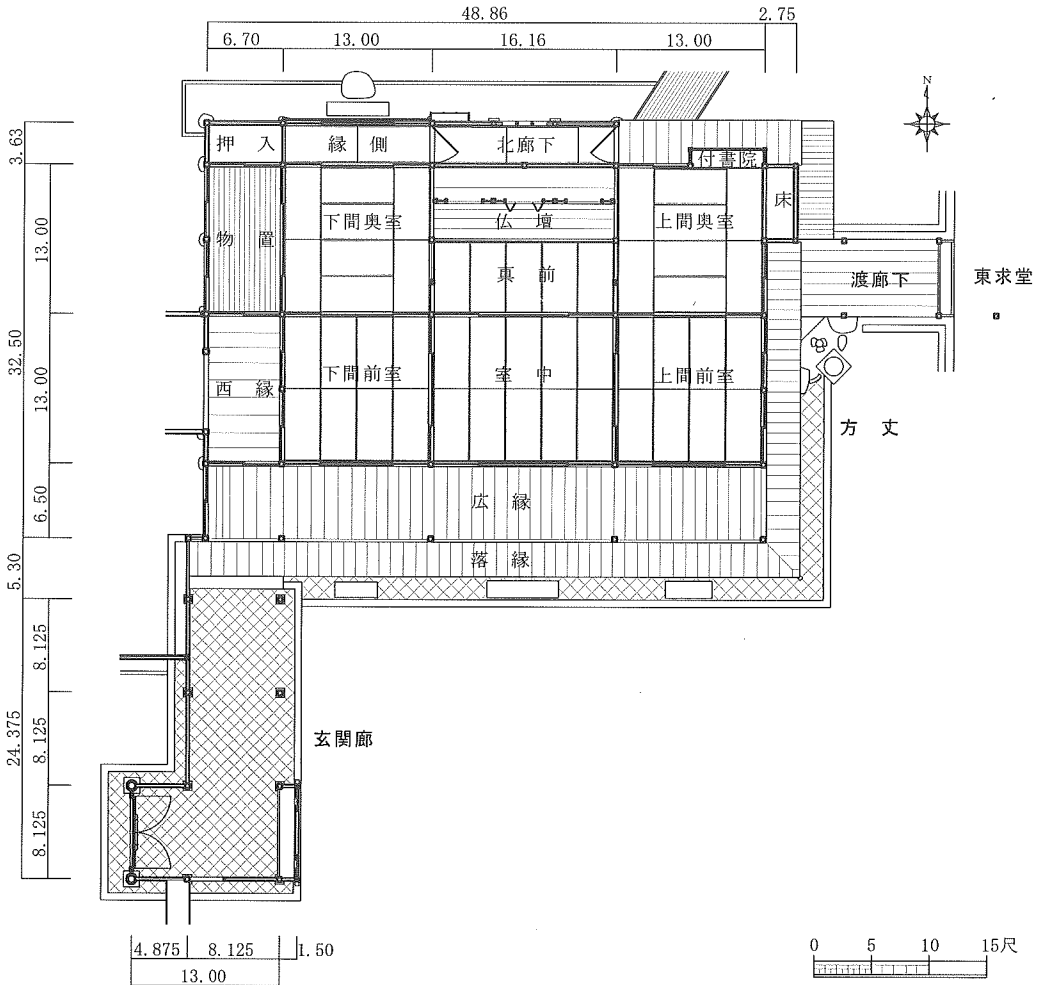


図 25 平面図

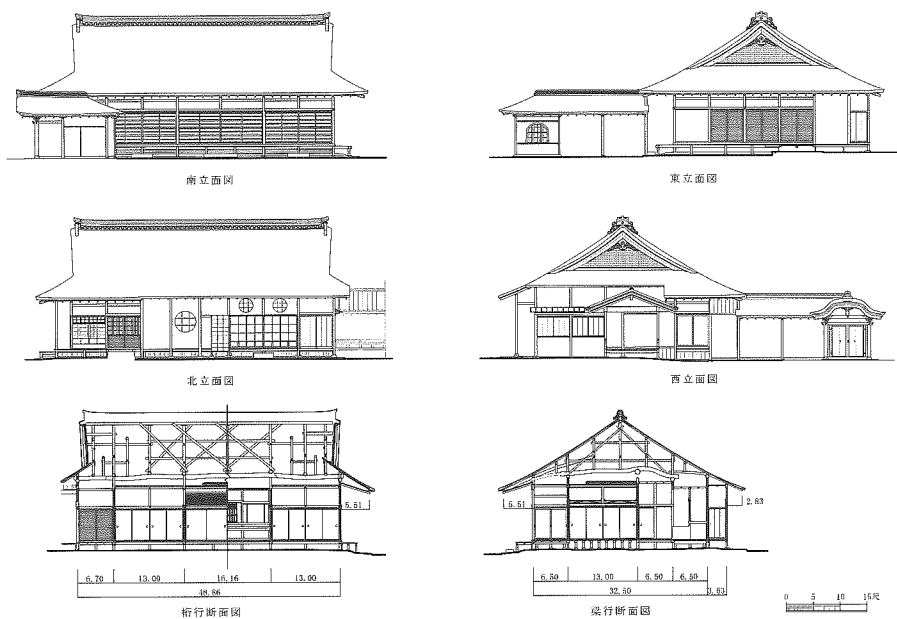


图 26 立面图、断面图



图 27 境内(東より)